

2008 年 3 月

中島 紀一

寒さのころもそろそろ終わりに近づき、陽射しは春を告げるようになりました。みなさまにはお変わりなくお過ごしのことと存じます。すっかりご無沙汰してしまい申し訳ございません。

鯉淵学園から茨城大学農学部（阿見）に転勤して間もなく 7 年目を終えます。

阿見で学生たちと進めてきた「耕作放棄地での農と自然の再生活動」が一つの軸となり、文科省支援の現代 GP「自然共生型地域づくりの教育プログラム（2005～2007）——都市周辺の荒廃農林地再生に向けた農学教育の新展開」が実施され、今年度で終了となりました。茨城大以外の 3 大学の農学部でも類似の課題で現代 GP を取り組んでおりました。そこで 4 大学が呼応して地域連携型の農学部教育を広げるという意味で共同の報告書を、筑波書房のご協力を得て出版することにしました。同封の本がそれです。

私は、東京教育大学農学部で菱沼達也先生（農学科総合農学研究室）に農学を学びました。菱沼先生の農学論は「農民に学び、農民の幸せを願う農学」であり、方法論は「村と学校を結ぶ」というもので「東京教育大学農学部成田分室」が学びの場でした。

1978 年 3 月に東京教育大学は廃学となり、南羽鳥集落の薬師堂に間借りしていた成田分室も 15 年の活動を終えて閉室となりました。菱沼先生が退職された後の分室責任者は助手の私で、分室の幕引き役も私でした。「そういう時には『閉室』ではなく『お開き』と言うものだ」と先生から強く叱られたことを憶えています。

あれは「閉室」だったのか「お開き」だったのか。以来ずうっと私の中にしこりとなって残っておりました。私自身は、その後も総合農学を標榜して生きてまいりましたが、成田分室のお開きの線上に何かを創れているのかという自問にはうまく答えられないままに来てしまいました。

一つの転機が鯉淵学園への転勤であり、次の転機が茨城大学への着任でした。阿見町は地産地消の生協産直の仲間だった飯野良治さんの地元であり、飯野さんからのお誘いで 03 年秋から地元上長地区での「うら谷津」再生活動が始まりました。その後 4 年が経ちましたが、たくさんの学生たちの頑張りや地元の方々との協働の中で、ぼつぼつとした歩みではありましたが、振り返れば「阿見にも農学部分室ができた」「いや阿見は大学の地元であり、そこでの自然共生型地域づくりには多くの同僚も参加しているのだから『分室』というのはおかしい、『本室』？とも言えるようになるかも知れない」と思えるような処までまいりました。

「分室」から「本室」への取り組みはまだ入口にさしかかったに過ぎませんが、一つのステップは踏めたかなと感じております。

この本は 4 大学の方々との共同出版ではありますが、私個人としては、上述のような経過から、恩師菱沼先生への 30 年ぶりの報告書という想いがございます。ご笑覧いただければ幸いです。